

# 若者たち

石川 康子

旅の3日目、独立記念館見学の後、韓国の若者たちに会うことになっていた。タップゴル公園（旧名パゴダ公園）で待っていてくれるという。土曜日の夕方、公園周辺の通りは人でいっぱい。ガイドのイー(李)さんがしばらくケイタイで連絡をとっていたが、やがて背の高いがっしりしたチョン・インチュン（鄭寅濬）君と中背で色白のユン・ソクチョウ(尹錫潮)君が現われた。もう一人、わたしたちに挨拶するためだけに駆けつけてくれたハンサムな青年がいたが、お名前は失念。お二人と一緒にまず公園を歩く。ここがパゴダ公園と名づけられたのは国宝になっている大理石の仏舎利塔（パゴダ）があるためだが、有名になったのは、1919年3月1日にここで日本からの独立宣言書を読み上げられ、いわゆる「万歳運動」の起点になったからだ。この運動は瞬く間に全国に広がり、1542箇所の集会に200万余の人々が参加し、手に手に太極旗（韓国の国旗）をもって行進した。公園の中にこの時の様子を描いた10枚の銅版のレリーフがある。その1枚に、デモの先頭に立ったキーセン（妓生）の髪を馬の尾に縛り付けて引き回す日本の官憲の姿があるが、すでにバスの中で、「社会的には蔑視されていたであろうキーセンがどうして運動の先頭に立てたのか」という大村さんの質問に対し、ガイドのイーさんから「彼女たちは政治家など偉い人たちと接触していたから、知識も豊富で意識も高かった」という明快な説明があり、日本でも明治維新の頃「民権芸者」とよばれた人たちがいたことを思い出した。

さして広くもない公園の見学は20分くらいで終わったが、ちょうど閉門時間になって追い出される。以前は24時間開放されていたが、ホームレスのねぐらになったので閉めるようになったらしい。そこからチョン君の引率で夕食会のレストランに向かうが、なにしろ15人が人ごみの中を歩くので、ちょっときよろきよろするとすぐ前の人を見失ってしまう。ついには丸山さんがなにやらパンフレットを頭上に掲げて誘導。それほど雑踏だった。

レストランから新たにキム・カヨン（金可研）



さんが参加。3人とも延世大学数学科の4年生。チョン君は2003年9月から2年間日本で日本語を勉強し、その後メキシコへ行って、今年の2月末に帰国、大学に戻った。卒業したら貿易関係の仕事につきたいという。日本滞在中に「ムルレの会」の大久保さんに「たづくり」で日本の社会について教えてもらったということで、今日の会合はその大久保さんのご尽力によるものだ。因みにユン君もマーケティングの仕事がしたいとのこと、上り坂にある韓国経済を実感する。キムさんはお母さんが日本人と再婚して山形にいたので、山形には行ったことがあるという。ばら色の頬に腫を輝かせて話すキムさんの笑顔に、われらが「昔の青年」たちは膝を乗り出し、早速大野さんが「結婚は？こどもは？」とダサーイ質問。「結婚はすると思うがこどもはほしくない」という答えにがっかり。後で仁寺洞をぶらつきながら彼女にきいてみたところ、「こどものことはまだ考えられない」というのが正確なところ。当たり前だ。誰が23歳の「男の子」に「結婚は？こどもは？」ときくだろうか。（ユン君はこどもはほしいと言っていたが、きかれもしないのに。）筆者の男性への『偏見』を大いに正してくれた「憲法ひろば」の男性たちではあるが、若い女性となると相変わらずだ。「憲法ひろばには素敵な男性がいる」と大いに宣伝してあげたのに。しかしこれはそういう問題ではない。

韓国の少子化は急ピッチで、昨年の特殊合計出生率（1人の女性が一生の間に生むこどもの数の平

均)は1・08で、日本(1・25)を下回り、世界最低レベルを記録した。女性の社会進出に伴う非婚化・晩婚化が原因といわれている。女性の就業率のM字分布(出産・育児期の就業率の落ち込みを示す)の谷が日本より深い韓国での当然の成り行きだろう。昨年はじめて30代の出産が20代を上回ったという。

日本で今熱い問題になっている憲法改正や九条のことはあまり知らないようだった。持参した「九条スカーフ」(41ヶ国語で憲法九条が印刷してある)をあげると、ハングルの箇所を珍しげに読んで「すばらしい」と言ってくれた。(このスカーフは、独立記念館でも、鶴沢さんのリュックの手作りワッペン「戦争反対・憲法九条を守ろう」をみて話しかけてきた日本語教師一家にもあげて、小泉首相とは違う日本人もいるということ伝えるのに大いに役立った。ワッペンがハングルで書かれていたらもっと多くの人たちと交流できただろう。)「日の丸・君が代」になるとちんぷんかんぷんで、日の丸はオリンピックで揚がる旗という認識。韓国ではじめて名乗り出た「従軍慰安婦」の金学順さんは、提訴のため来日する際、日航機の翼の日の丸をみて失神したというが、その世代とは断絶している。独立記念



館の入り口の両側に何百という太極旗がはたみえていて壮観だったが、国が国民に国旗掲揚を強制しなければならない国、そして国民がそれを拒否しなければならない国、まして「愛国心」を法律で強要しなければならない国は、かれらの理解を超えるだろう。

未だに国土を分断され、冷戦の緊張の中にいる韓国では徴兵制があつて、青年たちは貴重な青春のうちの2年半という長い期間を辛い訓練にさかななければならない。ヨーロッパにあるような「良心的兵役忌避」の制度はなく、「そんな穴があれば制度が崩れてしまう」とガイドのイーさんは言っていた。どんな有名スターでもこれを逃れるすべはなく、そのためにわざと体を傷つけたりするという。盧武鉉大統領の対抗馬だった李会昌氏が、その経歴や地位にもかかわらず敗れたのは、かれが地位を利用して2人の息子の兵役を免除させたからだといわれている。でも徴兵制は絶対必要なものではなく「政治家の考え次第だ」とチョン君は言う。「北朝鮮が攻めて来ると思いますか」という問いにたいしては、「思いません」ときっぱり答えた。

「ハンギョレ新聞は読みますか」と尋ねると「あまり読みません。インターネットのニュースのほうが影響が大きいです」というのが答えだった。初日に訪問して、われわれを大いに感激させたハンギョレ新聞も、もう最先端を行っているというわけにはいかないらしい。今韓国は「オーマイニュース」などの市民ジャーナリズムが花盛りで、3万3千人を超える市民記者が活動しているという。盧武鉉大統領の選挙戦も、若者たちがインターネットを駆使して勝利に導いたのだった。

食事の後、露店やさまざまなみやげ物の店で賑わう仁寺洞をぶらつき、飴職人の見事な技や珍しいお面などにすぐひっかかるきまなおじさんおばさんたちに辛抱強く付き合い、地下鉄でホテルまで送り届けてくれた。更にチョン君は翌朝もホテルまで来て、町を案内してくれた。高齢者の足に合わせながら、景福宮の衛兵交代の古式ゆかしい儀式や、復旧された清溪川に沿ったプロムナードなど必見のものはもれなく見せてくれた。

初夏の風と豊かな緑の中にあつたソウルの爽やかな印象が、3人の若者たちの姿に重なる。こういう若者たちと日本の若者の交流を広げることが日韓友好の新たな展望を開くだろうと思う。

# 清溪川(チョンゲチョン)の復元

三宅 征子



ソウル旅行の最終日(5/14(日))午前中の自由時間に、鄭(チョン)さんの案内で見に行くことができました。私にとって今回の旅行の最大の目的は、板門店ツアーでしたが、知人から聞いていた清溪川の復元の様子も、出来たら見てみたいと思っていたので、願いが叶いました。

この日はちょうど日曜日ということもあり、初夏のさわやかな日射しの中、憩いを求めてやってきたソウル市民が、親子連れや恋人同士で川辺の散策を楽しんでいました。水量も豊富で川底が透けて見えるほどの綺麗な水に感激しました(地下水を汲み上げて放流していた由)。また川に掛かる橋のデザインが皆違うなど、親水空間にゆとりと配慮も感じられました。

2005年9月に工事は完成したとのことですが、この日も何かイベントが行われていたようで、催しのテントが張り出されていました。

市民の強い意向に基づいて、市長がその行政的権限を政治的に発揮し、不可能とも思えるような事業が実現した意義は、関連学会や研究会等でも高く評価されているようです。日本の諫早湾や八ツ場ダムの裁判の経緯などを見るにつけ、この違いはどこにあるのだら

## 一ノ瀬俊明(国立環境研究所主任研究員)「ソウルの大規模な清流復活事業「清溪川復元」より(環境再生政策研究会資料 2004/6)

清溪川は、ソウル市中心部を東西に流れ、漢江(ハンガン)に合流する延長約11kmの都市内河川だった。李氏朝鮮の時代から都市下水路としての性格を有していたが、20世紀初頭の清溪川周辺の人口密集化は、河川周辺地域の衛生問題を深刻化させた。この問題に対して行われた50年代後半に始まる本格的な覆蓋道路化(暗渠化)工事を受けて、沿道の市街化と交通量の増加が進行し、70年代初頭には約6kmの高架道路(4車線)も完成した。しかし近年、聖水(ソンス)大橋崩落事故を受けてのインフラ脊点検の結果、高架道路や覆蓋構造物にも安全性の問題が指摘されると同時に、自然と共生するまちづくりが見直され、この機会に清溪川を都市内の大規模清流・親水空間・高価値ビオトープとして復活させようという動きが、市民サイドから巻き起こった。このような背景のもとソウル市政府は、この高架道路を数kmに亘って撤去し、従前の都市内河川を復活させる事業を決定した。この事業の環境改善効果としては、交通量の減少による大気浄化はもとより、河川周辺の夏季における暑熱の緩和効果にも注目が集まっている。都市内におけるこのような大規模な清流の復活は世界にも例がない。

2003年7月に始まった復元工事は、測道を残し、高架道路を撤去、次に直下の暗渠を開削し、最終的に緑豊かな親水空間を創出するというものである。復元工事に先立って様々な環境影響評価が行われ、ビオトープの専門家などを集めた国際シンポジウムも行われている。さらにこの復元工事は、周辺地域の再開発と一体のものとして検討されており、復元後の良好な環境が、ローカルな経済の活性化にも貢献すると考えられている。

## 歴史プロジェクト第1回研究会より(2004/6)

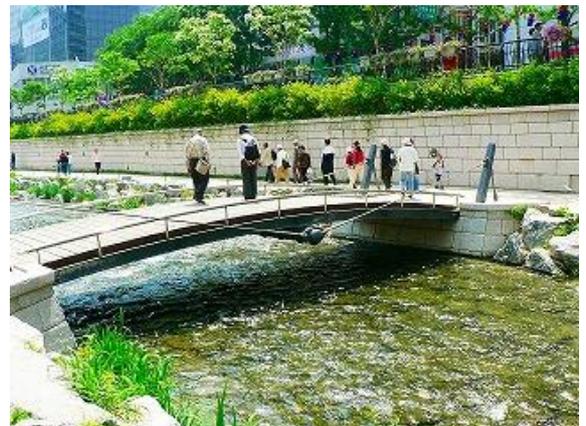
1958年から1978年まで、段階的に汚染された河川に蓋をし、さらに都市交通の便を良くするために清溪川の覆蓋工事が行われ、1967年から1972年には韓国の高度経済のシンボルとしての高架道路が建設された。こうして、総延長約6.0km、幅員50~80mの覆蓋道路と、総延長約5.8km、幅員16mの清溪高架道路が建設され、清溪川の河川としての意味は、完全に失われた。

2002年7月に清溪川復元事業を選挙公約の第一に掲げ、ソウル市長に就任した李明博は、ソウル市民80%の賛成のもと、2003年7月から覆蓋道路と高架道路の取り壊しと清溪川の復元という大工事に着手した。

うかと考えてしまいました。

韓国は今、日本の60年安保の頃のあの高揚感の中にあるのでしょうか。一方、日本は、プチブル的時代を経過し、個がばらばらにされ、まとまるべきところまでが分断されてしまっているような気がします。これを再構築するためのキーワードはやはり「日本国憲法」であり、その核が「9条の会」なのだと思います。南方熊楠の言葉を鶴見和子さんが紹介し、さらにその言葉を「9条の会」を立ち上げたとき、大江健三郎さんが使った「萃点」のように。

今回の旅行は、調布憲法ひろばの有志によるものでしたが、とにかく楽しかった！この経験から、何事もまず楽しくあらねばいけないかもと、日頃禁欲的(?)な私も、つくづく思ったことでした。(写真は鈴木さん)



## 旅の印象も料理の味も激辛でした

加藤 由美子

今回の韓国ツアーは主に戦跡をめぐるものでしたので、加害の国日本から来た私たちにとっては緊張する旅になりました。

日本がドイツのような戦後処理を行っていないうえ、小泉首相の靖国神社参拝や憲法9条の改正問題などでアジアの国々を刺激していることに、改めて怒

りがこみ上げてきました。本当に嘆かわしい限りです！

厳しさを伴った旅でしたが、楽しい旅行になりました。旅の印象も料理の味も激辛の刺激に満ちていましたが、ざっくばらんなおしゃべりで交流を深めることができました。

一日目に訪問した民主的な新聞のハンギョレ新聞社での、記者や労働組合役員との懇談は大変有意義で感動的でした。韓国の政治状況や労働者の権利の問題などの理解を多少なりとも深めることが出来たと思います。自覚的な国民の出資による新聞ということで何か熱いものを感じました。韓国の新聞のなかで4番目に影響力を持っている「戦う新聞ハンギョレ」、経営の困難を抱えながら頑張っている姿に励まされ、私が今回の旅行で一番印象に残った場所です。

西大門刑務所跡や3日目に訪れた独立記念館では、日本の植民地時代の圧制を生々しく見ることになり、申し訳なさを減入る思いでしたが、一方では韓国の人々の中にある抵抗のエネルギーが脈々と過去から現在に引き継がれていることを感じ、力強く思いました。

板門店ツアーでは、現在休戦中であり停戦ではないことを改めて知り、緊迫した状況を実感しました。世界でただひとつ南北に分断されている国の複雑な事情を垣間見た思いです。友好ムードをつくりながらも脱北者をツーリストとして採用し、観光客にキムジョンイル体制のひどさを（本当にひどい）積極的に語らせるなど、韓国には複雑なお国事情があるのです。

「独立宣言書」が読まれたとされるパゴダ公園は独立記念館と同じく、植民地時代の朝鮮民族の独立への輝かしい戦いの歴史を偲ばせる所でした。日本が朝鮮民族にしてきた残虐な歴史はさておき、日本にこのような民族が誇る記念すべき場所がないことを、つくづく感じました。



韓国旅行を通して痛感したことは、やはり歴史の事実は重くても私達日本人一人一人がしっかり向き合わなければいけないことなのだと思います。

ドラマ「冬のソナタ」が生んだ最近の韓国ブームは、両国の民間レベルの交流を盛んにしましたが、日本の国民が謝罪を抜きに、ただうわべだけ仲良くといった風潮に流されてしまうことのないよう、真の友好に向けた運動が必要です。平和と友好への強い決意を持った現行憲法を広めつつ、完全な実施を求め続けてゆくことが大切ではないでしょうか。そのことによって韓国・朝鮮を初め、アジアの国々の人々と堂々とつきあうことが出来る日に少しずつでも近づけてゆくことができるのかも知れないと改めて感じた今回の旅でした。

## 反共国家のイメージが大きく変わった

小島 崇志

訪問前まで、私の韓国に対する知識は戦前の植民地時代や朝鮮戦争の休戦ライン（板門店）、軍事独裁国家からようやく抜け出したばかりの反共国家と言うイメージが強くありましたが、今回、調布「憲法ひろば」の韓国旅行3泊4日の旅に参加して、大きく変わりました。

印象に残った場所は、戦う新聞「ハンギョレ新聞社」の見学と懇談会での話し合いで現在の韓国の政治状況が理解できました。「西大門刑務所跡」（植民地時代の政治犯収容所）では日帝との戦いで勇敢に戦った朝鮮民族の歴史を始めて知らされた思いがしました。「独立記念館」は朝鮮民族5千年の輝かしい歴史が朝鮮時代と植民地時代に分けられて特に日帝侵略館は日本による武力侵攻の過程と植民地期間中に行われた無慈悲な弾圧と経済的略奪、それに民族精神の抹殺の危機に接した苦難



の歴史が詳しく展示されていました。多くの朝鮮人が見ている中自分あまりにも知らないことと日本が朝鮮民族に対して行ってきたことに対して謝

罪の気持ちが自然と湧いてきました。

「板門店」では今でも戦争状態のような緊迫感を感じながら現実の厳しさを痛感しました。「安重根記念館」や「パゴダ公園」も民族の戦いの歴史が随所であり、改めて朝鮮民族の偉大さに頭が下がる思いをいたしました。

韓国から帰って日本の現実を見ると相変わらず小泉

総理の靖国参拝が肯定される風潮があり情けなくなります。韓流ブームで多くの日本人が韓国に旅行していますが、ヨン様やブランド品の買い物、焼肉の食べ歩きだけでなく是非韓国の歴史を学んでほしいと思いました。

## 強く感じた民族独立への思い

近田 三男

ツアーに出かける前に、日本・中国・韓国＝共同編集「未来をひらく歴史」と「観光コースでない韓国」を急いで読んだ。しかし一夜漬けの勉強でほとんど頭に残っておらず、かえってガイドさんの説明が新鮮に聞かれた。初めての韓国行きで、現地に行かなければ得られない貴重な体験をした。とくに強く感じたのは、民族の独立への思いである。広大な敷地に建てられた壮大な独立記念館は、初めは、いやにばかどかく、威圧的に感じたが、民族伝統館から始まる7つの記念館を見ていくうちに、五千年の歴史のなかで、数え切れない回数侵略を受け、とくに近現代の日本による、日本名に改名され言語まで奪われた侵略によって、言語に絶する民族的苦痛を受け、民族独立への思いが強烈なものになったと感じられた。そして壮大さは建国の強い意欲の表れと思われた。

この独立記念館の建設は、日本の「歴史教科書歪曲問題」に端を発しているだけに、過去の歴史的事実に対する日本人の認識を正す重要性をつくづく感じた。



それと同時に、韓国や中国を蔑視しながら、アメリカのいいなりになっている政府の卑屈な態度には、怒りとともに情けなさを感じた。

また、私自身、歴史の勉強をしておさなければと強く感じたしだいである。

## ソウル4日間の旅に参加して

任海 ユリ

旅行に行く前から宿題を出されたのは今度が初めて、テキストの本を出発前ギリギリに読み終わり期待と不安な気持ちでの参加でした。

集合時間も7時30分と随分早く私たちは調布発5時30分のバスで成田に向かいました。連休明けとゆうのにバスにはたくさんの人たちが乗り合わせていました。成田に着いたのが7時少し過ぎ、一緒に行っ

てくれるはずの方々が一人も見あたらずさっそく右応左応しましたが旅行社の手違いでカウンターの表示が違っていたとのこと、時間ギリギリに皆さんと御対面出来ました。近くて遠い国 韓国への旅は個性豊かな方々と御一緒し楽しい4日間を過ごさせて頂き、日本と韓国の関係、そして歴史を学ばされる旅でした。

今 韓流ブームとかで韓国へ旅する人も多いようですがこの「9条の会」の旅行は、日本がかつて大変な過ちを犯した事実をまざまざと見せつけられる4日間でした。また、そこで感じたことは、平和の大切さや世界の宝とも言われている憲法9条のある国で良かったと実感させられました。

板門店と非武装地帯へのツアーでは今でも「休戦協定」のもとでの戦争状態が続いている南北の緊張した関係を見学し、軍事境界線に立つ両側の兵士の顔がどこか日本の若者達ともだぶって見えます。ここでも平和憲法のある事のありがたさを再認識しました。その非武装地帯の中にも美しいお花が咲き乱れ、白い鳥たちが群なり楽しそうにしている所もありました。これは自然のままに保護されているからだとか、鳥たちには南も北もありませんからね、とガイドさんの説明、この国にも1日でも早くこのような時代が来ることを願わずにはおられません。

澄み切った青空の下で広々とした庭には民族の塔がそびえ立ち、親子づれの目立つ独立記念館では韓国五千年の歴史にも触れる事が出来ました。ここでは土曜日ということもあってか、学生さんや親子づれの方が多くあちこちでメモを取る姿も見えました。

この国では、国民学校教科書4年生では柳寛順（ユガンソン）を学び、5年生では安重根（アンジュンゲン）を勉強するそうです。日本との歴史教育の違いを感じさせられました。

そういえば、我が家の娘も海外で勉強していた時に韓国、台湾、アジアの学生さんと話して1番困ること



は、日本の歴史を正しく教えてもらっていない事だと言っていたのを思い出しました。ここの記念館では、かなりのスペースを裂いて日帝侵略館と言う展示館があり最初の方は、早足で見て、ここを重点に見ましたがまともに目を向ける事の出来ないような日本の支配時代の悪行を再現していました。とても悲しい出来事が日本人の手によって行なわれた事を悲しくおもいました。

また、どこの国へ行っても食べ物には興味津々、韓国でも値段の高いものから信じられないほど安いものまでごちそうになりました。

宮廷風、家庭風、現代風といろいろ美味しいもの揃いの中で1番は何と冷麺、飲物ではマッコリが美味しかった。大野さんごちそうさまでした。そして、ご参加のみなさん大変お世話になりました。

## 恥じ入るばかり 反省しきり

鷓沢 希伊子

この旅では韓国が、歴史についてどのような姿勢をとっているのか、また現代の韓国人は、子供の時見ていた戦前、戦中の韓国人と、どう変わっているかを見てきたいというのが、私の目的だった。

先ず目にしたハンギョレ新聞社社屋の壁の醸金して社を創立した6万名の市民の名と、独立記念館も市民の醸金で建てられた物と知った時、真実を知ろう、伝えようとする人々の熱意に感動した。

祖国独立を、名もない庶民や農民までが希求し願望し、命をかけて闘い取ろうとした様が、いろいろな形で展示されているのを見て、その情熱の凄まじさに打たれた。そこ迄追いこんだ日本の侵略の誤りや酷さを



改めて申し訳なく思う。現在の日本を省みると、独立しているとは形ばかり、アメリカの属国という現状だ。そこから脱出しようとの国民的意志、情熱は希薄である。若者達はアメリカ礼賛だ。日本はこれで良いのだろうか。ノート片手にじっくり回っている子供達の姿も多い。後世に伝えようとする国民の願いが生きていた。西大門刑務所歴史館など、歴史の真実を後世に伝えようと、執拗なまでの努力も続けられている。それだけ「恨」が強いのかと、日本帝国主義者の末裔としては、恥じ入るのみだが、加害も被害もあっさり忘れ、次世代に伝えていない日本人の、誤りの深さを猛反省する。休戦状態が続く板門店、緊迫した空気と日常との遊離に滑稽感すら湧く。祖国分断の悲劇渦中の民族問題、統一を目指しても実現は至難であろう。再び一つになる迄の道程の遠さも考える。分断を逃れた日本の、60余年の平和の有難さ、重さを痛感し、憲法、教育基本法を守り抜き、平和な世界確立の先頭に・・・

再び決意する。

韓国の近代化の目覚しき、人々の体格の良さ、顔立ちの凛々しさ、茶髪の若者、狸化粧の女性も見ず、服装も質素で自然である。街の各所にゴミや空缶が落ちていず、ゴミの山も無い。植え込みに飲みさしの缶が突き立てられてもいない。地下鉄に乗れば、さり気なく席を立つ若者達に会う。飲食したり化粧をする女性など皆無、無作法者の姿も見ない。儒教の教えが脈々と流れている様に思う。

日本は政治家をはじめとしてアメリカナイズされ、アメリカの悪い点のみを真似ている。韓国と較べ反省する事ばかり。

日本人は先ず、民族の誇りを取り戻すことから始め、過去の歴史に学び、贖罪を目指してアジアのため世界のため、謙虚に奉仕する事を行わなくてはいけない。若い人達にこれをしっかり伝えていく事が、私の仕事であると再確認する旅になった。

## 緑の彼方に「ヨシエ」の空があった

鈴木 彰

### 「ヨシエ」との遭遇と別離

「キューポラのある街」で

吉永小百合主演の映画「キューポラのある街」(1962年日活/浦山桐郎監督)は残念ながら観ていないのですが、その後発刊された定稿版・5部作(早船ちよ著、理論社刊)で読みました。鋳物の町川口を舞台に爽やかに成長して行く少女ジュンに心を奪われて一気に読んだのですが、実は私は、ジュンの青春と重ね合わせて描かれていた、在日朝鮮人を父に持つ「芝川のヨシエ」が気になって仕方がありませんでした。ジュンと同じ街で、差別と貧しい暮らしにくじけず、健気に生きてきた心やさしい少女は、母親や弟サンキチとの別離の悲しさに耐えながら、新国家建設への希望にすがれる父親と一緒に、北朝鮮に旅立って行きました。

「北鮮帰還」のニュースには触れていても、その背後にある日本と朝鮮の関係と歴史、人びとの苦悩を知らなかった20代の私は、「ヨシエ」との遭遇と別離に



少なからぬ衝撃を受けたのでした。

思えば私の20代は、戦後20~30年の時期。丸ごと1960年代ですが、時代そのものが熱く、激しい葛藤と変化に満ちていました。安保改定・ベトナム戦争・日韓条約・沖縄返還・70年安保など、社会と政治は激動し、だれもが未来を信じ、反戦・平和と民主主義の運動も「汚れを知らない？」生成期にありました。

その10年間は私に、大学生としての「学生運動」と「60年安保共闘」、卒業後就職した中小企業での「労働組合運動」、転職して関わった生協職場での「消費者運動」など、めまぐるしい出会いをもたらしました。これらの出会いを通して私は、幼時に戦争で実父を失った自分の悲しみや悔しさを、平和と民主主義を求める社会的な願いに合流させていくのですが、その途上で「ヨシエ」は私に、単なる戦争の被害者としてではなく、「人類と地球」「平和と民主主義」と言う広い視野を持つことを求めました。

## アメリカの危険で露骨な横槍

「日韓会談」から「日韓条約」へ

日韓政府の間で「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約（日韓条約）」が仮調印されたのは65年2月20日でした。第3条に「大韓民国政府は……朝鮮にある唯一の合法的な政府である」と明記し、朝鮮の南北分断の固定化と北朝鮮敵視をあからさまに宣言したこの条約は、60年に改定を強行した「日米安保条約」、61年5月16日のクーデターで成立させた朴正熙による「韓国軍事政権」を足がかりに、アメリカを盟主とする「米・日・韓」軍事同盟を確立・強化するものでした。

そもそも「日韓条約」を準備してきた「日韓会談」は、アメリカのアジア侵略戦争と照応する軍事的性格をもっていました。それはまず、朝鮮戦争の真最中にGHQのあっせんで開始され（1951年10月20日に予備会談、52年2月5日に第一次会談、53年に第二次～三次会談）、53年7月27日の朝鮮戦争の休戦協定、同年10月13日の久保田発言（日本側代表が「日本の朝鮮統治は朝鮮人に恩恵を与えた面もある」と発言）などを契機に中断・決裂しました。しかし、金門・馬祖戦争、「日米安保条約」の改定交渉などを契機に58年に再開（第四次会談）。アメリカの「ベトナム侵略戦争」の盛時に第六次～七次会談（64年3月12日、12月3日）を推進して、「日韓条約」の調印に至ったわけです。

アメリカによるポスト「朝鮮戦争」としての「ベトナム侵略戦争」とそのエスカレート、韓国軍の参戦、日本の前線基地化と言う流れが、「米・日・韓」軍事同

盟を急激に実体化する真最中の65年6月22日、日本と韓国の政府は「日韓条約」の本調印を強行し、その成立に向かって国民の意見を踏みにじります。8月13日にベトナムへの1万5千人の軍隊増派を決めた韓国国会では、その翌日の14日に与党による単独採決で「日韓条約」の批准を強行。これらに対する国民の批判を戒厳令で抑え込みます。日本では10月に開会した「日韓条約批准国会」で12月11日、自民・民社両党が可決を強行します。

## はからずも「ヨシエ」と再会

「日韓条約」反対の運動を通して

しかし、アメリカの侵略戦争をバックアップする「日韓条約」は、日米安保条約のもとで独立・平和と民主主義を求める日本の国民にとっても、祖国の自主的平和的統一を求める南北朝鮮の国民にとっても、安易に受け入れることの出来ない条約でした。日本・朝鮮・韓国の国民は、この条約の成立を阻止するために、それぞれの条件のもとで国民的な運動をひろげました。私の印象ですが、三つの国の国民の、共通課題での連帯が、この時期ほど大きく前進したことはありません。

とりわけ日本では、韓国国民との連帯のもとに「日韓条約批准阻止、ベトナム侵略反対、小選挙区制反対、全国統一行動」（9月12日）に全国で50万人、東京晴海での「10万人中央大集会」に予定を超える13万5千人が結集するなどの記録的な運動がひろがりました。

日本と北朝鮮の合作映画「チョンリマ（千里馬）---社会主義朝鮮の記録」が完成し、その上映運動がとりこまれたのもこの時期です。私は、社会主義建設と南北朝鮮の自主的平和的統一を求めて意気高く働く人びとの映像に、私は「キューポラのある街」を去って行った「ヨシエ」の元気な姿を見つけたような気がしたものです。

アメリカのアジア侵略戦争に協力する「韓国政府」と、これを許さずたたかう「韓国国民」と「北朝鮮」という構図で、当時私は朝鮮・韓国を理解しようとしていました。しかしものごとはそんなに単純ではなか

ったようでした。

ベトナム侵略戦争でのアメリカの敗北が色濃くなつた73年3月23日、韓国軍がベトナムから完全に撤収するのを見て、私は、アメリカと運命をともにすることしか考えていない日本政府との違いを垣間見た思いがしました。また、同年8月8日に起こったKCIAによる金大中氏拉致事件は、韓国における民主主義の運動が、厳しい反動の嵐を呼び起こしながらも前進していることを感じさせました。

北朝鮮の動きには逆の印象が強まりました。実は映画「チョンリマ（千里馬）---社会主義朝鮮の記録」を観賞したとき、一方で「ヨシエ」との再会を喜んだ私は、他方でこの映画のいたるところに漂う「指導者・金日成首相」への媚びへつらい、個人崇拜の空気への「漠然とした戸惑い」を覚えたのです。

そして残念なことに、この「漠然とした戸惑い」は、69年の大韓航空機ハイジャック事件、77～83年に起こった一連の日本人拉致事件、87年11月28日の大韓航空機爆破事件などを通して、次第に顕在化して行きました。

再会できた「ヨシエ」との間に隙間風が吹きぬけたこの頃から、他の課題に追われるようになったこともあり、その後の韓国・朝鮮での多様な変化を小耳にはさみながらも、変化の背景にある本質を見極める努力を私は休止し、正直なところすっかり「ヨシエ」のことを忘れていました。

## 「ヨシエ」の幸せを確かめる旅

すきま風を塞ぎながら……

自衛隊のイラク派兵。総理大臣の連続的な靖国神社参拝。日の丸・君が代の強制と教育の反動化。日



本国憲法9条に照準をあわせた憲法改悪の動き。……わが祖国ニッポンで開始されている新しい政治反動は、日本がかつて行なった侵略戦争を「自存自衛のための正義の戦争」と公言し、韓国



への侵略を「朝鮮の独立を助けたもの」と強弁しています。こうした歴史の捏造に、中国や韓国・朝鮮はおろかアメリカからも批判が噴き出していますが、日本の国内でも、わずか2年間で全国に5千を超える「九条の会」が生まれるなど、政治反動を許さない大きな流れが生まれています。

「九条の会」のよびかけに応じて一昨年（2004年12月8日）、480人の参加で生まれた調布「憲法ひろば」も、毎月例会を開き、憲法を守り生かす確信と世論をひろげるために奮闘してきましたが、そこに集う有志のよびかけで「ソウル3泊4日の旅」が実施されました。

憲法第9条は私たちの誇りであり、人生の拠りどころ、心の支えだが、韓国の人びとはどのような思いでこれを見ているのだろうか。最近の日本の政治反動をどのように受けとめているのだろうか。日本の為政者の歴史観を批判する韓国の為政者は、いったいどこが違うのだろうか。自主的平和的統一を求めているという朝鮮民族の性根はどこにあるのだろうか。……「ヨシエ」との久しいご無沙汰を埋め合わせるだけではなくて、この間の変化の本質を少しでも見極めたいと願って、私はこの旅に加わりました。

知性と感性豊かな同行者たちにめぐまれて、稔り多い旅でした。文章にまとめるには、いま暫くの消化期間が必要ですが、朝鮮の持つ豊かな風土と歴史、そこで培われた独立・自尊の誇り高い民族、祖国統一への思いの深さなどに触れた気がします。

板門店から眺めた緑の彼方に青く静かに、「ヨシエ」の空がひろがっていました。

# 狛虎（こまとら）？

むらき 三太 入力・むらき数子

おらあ三太だ！ むらき数子んちの柴犬だ。  
忘れっぽいおかあのために報告してやるんだ。

おかあ、韓国にいる間、猫は1匹も見なかった。  
ガイドさんに聞いても、韓国から来た人の話（※1）でも、  
日本より猫が少ないらしい。

安重根義士記念館ってところ行ったら、でっかい猫（※写真1）  
が玄関番してる！

近寄ってみると、虎だ。狛犬（こまいぬ）じゃなくて、狛  
虎、か。

すごい縞模様だ、ユダル国民学校に剥製なって韓国に唯一残  
ってる虎（※2）をモデルにしたんだろうか？

そういや、ソウルオリンピックのマスコット「ホドリ」「ホ  
スニ」は虎の子だった。

日本人の「虎の子」と違って、韓国人はほんとの虎（ホラ  
ンイ※1）が好きらしい。韓国の民話じゃあ、虎はスターなの  
に、猫はさっぱり出てこない。

タップコル公園（旧パゴダ公園）の近所はとっても賑やかだ。  
案内してくれた韓国のニイチャンが、「東京なら浅草みたい  
な所です」って言った。

露店の籠甲飴屋さんにも虎（※写真2）がいた。

ソウルのど真ん中、光化門へ行く。  
ここでも虎が門番してる（※写真3）。

けど、虎にしちゃ渦巻いた毛並みがすごくおしゃれだ。  
景福宮に入ってくと、興礼門と勤政門との間の水路「明堂水」  
の護岸にもいた（※写真4）。

民俗学のS先生に聞いたら、これは、ヘッテといって、「是  
非善悪をわきまえるという獅子に似た想像上の動物」と辞書  
にあるんだって、教えてくれた。

※1 ちよん・ひょんしる『民話で知る韓国』日本放送出版協会、  
生活人叢書177、2006年4月

※2 遠藤公男『韓国の虎はなぜ消えたか』講談社、1986、p.57



写真1



写真2



写真3



写真4



憲法9条で戦争と平和を考える **ソウル訪問記**

調布「憲法ひろば」番外編  
2006年5月11日(木)~14日(日)

-----発行-----

2006年7月2日  
憲法「九条の会」調布のひろば (略称・調布「憲法ひろば」)